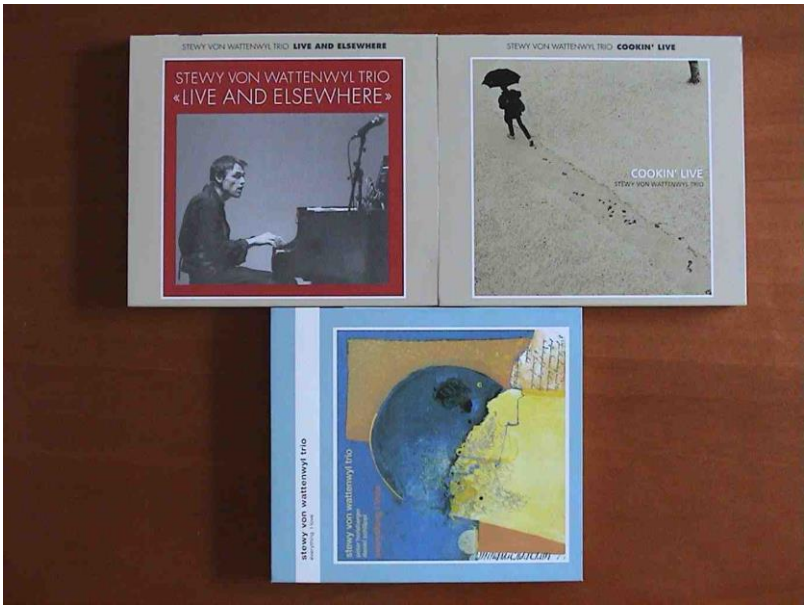
こんなディスクがいまのお気に入り

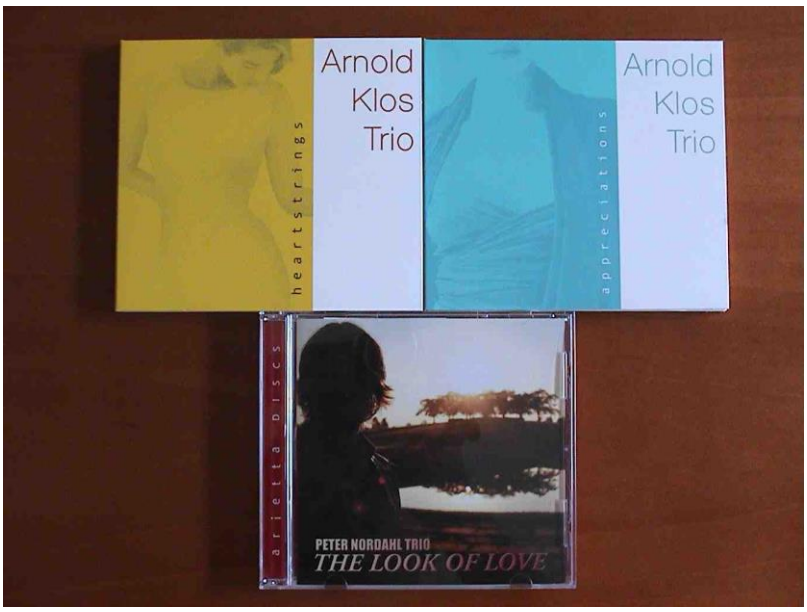
真空管プリを完成させてからというもの、音源に飢えて HMV を漁り歩くのが愉しみのひとつになりました。週末は深夜から早朝にかけて、仕入れたディスクを聴きこむのが最近の小生の習慣です。次にはどんなアンプを作ろうか、という意欲もひとまず休眠状態。もともと音を良くするためのアンプ自作であって、まずは聴く耳を肥やさないとイカンですよね。本当はライブ演奏にもっと親しむべきなのでしょうが、それは独身時代にキチンとやっておけば良かったと思う今日この頃。悔やんでもしょうがないので、ヴァーチャルリアリティとサイバネティクスの元祖であるオーディオ技術をせいぜい活用することにいたしましょう。そこで、いま気に入っているディスクたちをちょっと並べてみました。それがお好きならこちらはいかが？というコメントがあれば、大歓迎です。御同好諸子、よろしくどうぞ。

この4枚はボブ・ジェームスの近作。お年を召してからのボブさん、渋くなりました。70 年代後半の作品（「タッチダウン」や「ワン・オン・ワン」）は小生もかつてアナログ盤を仕入れて、リズムの明るさに感心しつつ聞き込んだものです。一方、これらの近作はお得意の低域・ベースラインはそのままに、メロディを熟成させたものなので、当方の現在の年相応の好みに何となくシックリきます。左上が「Restless」。しょっぱなの”Lotus Leaves”は Nathan East のバスに乗せていかにも官能的な調べが美しくカラミます。7 曲目は”Back to Bali”ですが、曲名のとおり民俗音楽調に仕上がり、ギターやガムラン（かな？）など様々な音域を持った楽器がちりばめられています。10 曲目の”Awaken us to the blue”はストリングスをいれた、大変明るいメロディラインをもった作品で、気持ちがホっとします。右上のアルバムは「Playin' Hooky」。3曲目の”The River Returns”を含め、全体的に落ち着いた仕上がりですが、中には女性ヴォーカルをフィーチャした、”Do it again”のようなドキっとするチューンも入っていて驚きます。左下がトリオ作品で「Straight Up」。目下小生が一番聴く頻度の高いアルバムです。本当はバリバリのスタンダードジャズがやってみたかったんだ、というボブの思いのこもっためずらしい作品です。3曲目に”James”というジェームス・テイラーを題材にしたチューンがありますが、まさにテイラー本人がふと口ずさみそうなメロディをトリオで奏でているので感心します。アルバム最後の曲が”Quiet Now”。Bill Evans の十八番ですが、これをボブ風にアレンジ。ピアノのエンディングが音の闇に消え行くさまが何ともいえず美しいと思いました。次が「Dancing on the

water」。こちらもめずらしく、ジョー・サンプルや松居慶子など、様々なピアニストとの連弾を試みた面白いアルバムです。6曲目の”Last night when we were young”にはデイブ・ホランドの重厚なバスが入っていて聞き惚れてしまいました。



こちらの3枚は、HMV の試聴コーナーにあったものをふと手にしたのがきっかけで、たて続けに買い込んでしまったものです。スイス出身の Stewy von Wattenvil（ステューイ・フォン・ワッテンヴィル）というピアニストのトリオ作品です。左上が「Live and Elsewhere」。ステューイのオリジナルナンバーが数多くおさめられています。隣が「Cookin Live」。”Take Five”、”Autumn Leaves”、”Stella by Starlight”など親しみのあるナンバーが入ったライブ作品です。下の段が「Everything I Love」で、最初に試聴コーナで手にしたアルバムがこれです。どのアルバムも、バス、ドラムスともに気合いの入った低音が聞けますが、特にこのアルバムを聴いた時は、思わず「これだ！」と喜んでしまったものです。ビル・エバンスの代表作（あとで登場）も聞込みすぎてさすがに飽きて来たところだったので、いくつか手当りしだいに購入しては、がっかりしたり、「おおっ！」と思ったりでしたが、この3枚はなぜか全てのテイクが気に入りました。



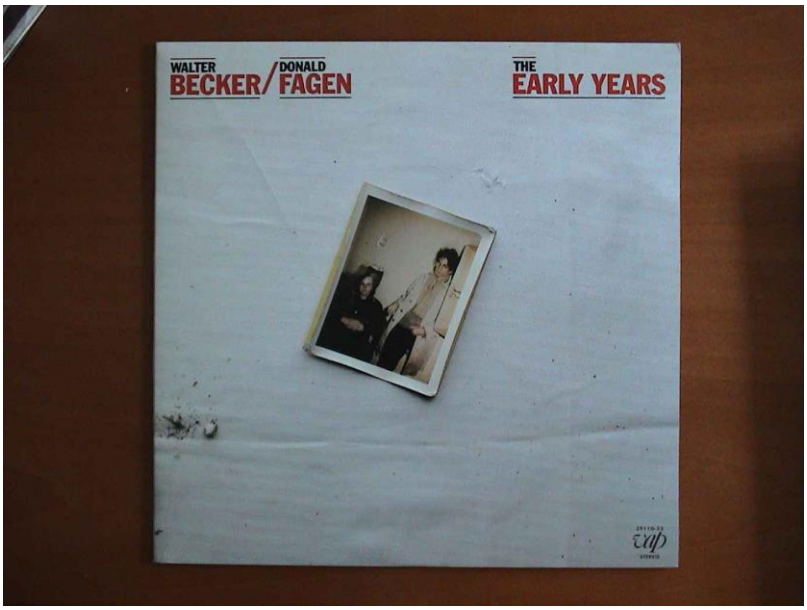
『澤野工房』プレゼンツ、アーノルド・クロスのトリオ作品２発（上段）。ビル・エバンスが化けて出たかっっ！と思える程、エバンスファンには涙もんのアルバムではないでしょうか。単たるコピーではなく、エヴァンスの音楽を謙虚に慕い、理解しようとしている様子が聴いているこちらにも伝わります。”Gloria's Step”、”Quiet Now”、などのナンバーが、なつかしいリリシズムそのままに最新の技術で大変丁寧に録音されています。下段の一枚は今週仕入れた、「The Look of Love」。Peter Nordahl トリオによるスローテンポが心地よいアルバムです。タイトル曲はバート・バカラックのナンバーだそうですが、ドラムスのブラッシングが「キモチいい！」の一言に尽きます。

あまり説明いらないですね。みんなのビル・エバンス。この他にも色々な種類のアルバムがあって、色々購入して聴いてみましたが、この４枚を超える仕上がりをもつものが見つかりませんでした。万人に受け入れられる感情を彼のピアノが奏で、光彩を放つことができた期間は、本当に短かかったのですねえ。同じナンバーでも、晩年のものは何やら荒れてしまっているように聴こえます。長く人の記憶に留まる美しいテイクを残した彼の業績はすばらしいですが、その一瞬に身も心も捧げてしまったのかもしれません。

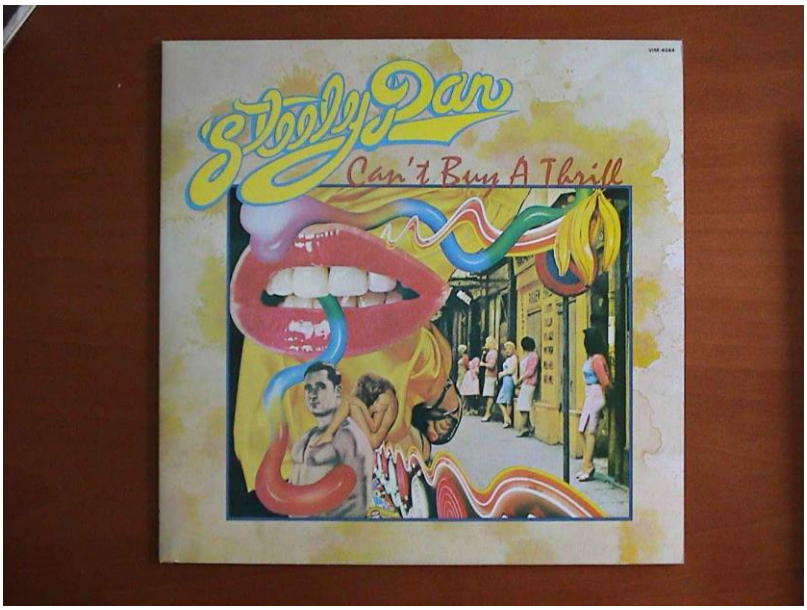
今回紹介したのは全てピアノ／キーボード作品ばかり。最近は好みが片寄ってしまってますが、またしばらくすると変わるのかも。何時の日か、自分で弾けるようになりたいなあ、などど、見果てぬ夢でしょうか。。。（Part 5 の終わり：2002.9.21）

わが青春のスティーリー・ダン

FEN（米極東軍放送）のトリコだった中学から高校にかけて、いつかは本当のレコードとステレオで聴きたいものだと願っていました。８０年代に入ってから、一所懸命そろえたスティーリー・ダンの LP を記念に一挙公開！聞込みすぎて音もスリ切れぎみ。CD の復刻版も出ているから、切り替えればいいんですけどねー。未だに捨てられずにおります。初期の CD 復刻盤は、LP と比べると音のクオリティが実際劣っているという話しを聞いたことがあります。２－３年程前発売された「Aja」の復刻 CD は、ベッカー／フェイゲンのコンビが相当苦労してアナログ音源の味付けを行い、CD 版にコンバートした様子が記されています。小生も「Aja」の最新復刻盤を持っていますが、LP と聞き比べた限りでは満足の行くものでした。

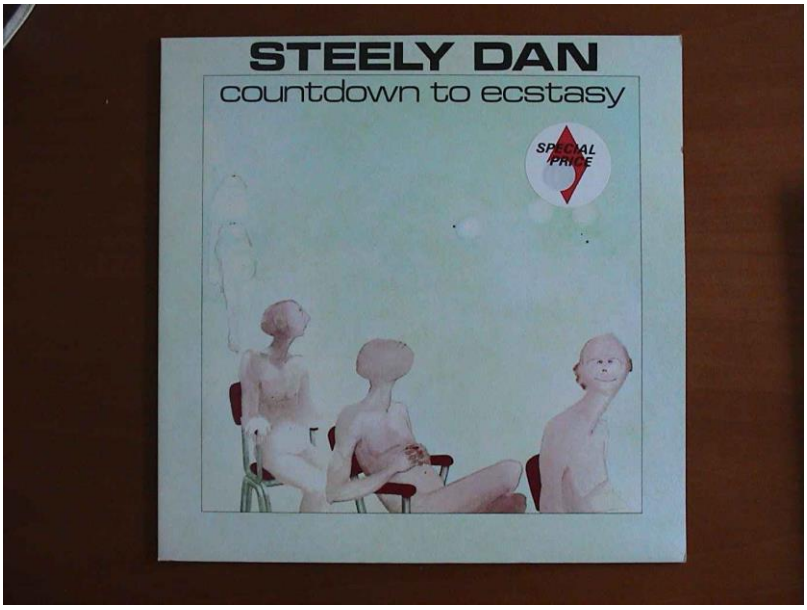


若かりし日の Walter Becker と Donald Fagen のコンビが録音した初期の作品音源を集めて、のちに発売された「Early Years」。この二人がすなわちスティーリー・ダン。キャリアの駆け出しのころから既に、のちの斬新なメロディーワークの萌芽が現れています。小生はこの A 面最後の"Brooklyn"というナンバーが大好きです。カントリー調のゆったりしたリズムに、電子オルガンのフレーズ、Donald のけだるいボーカルが絶妙に合ってます。

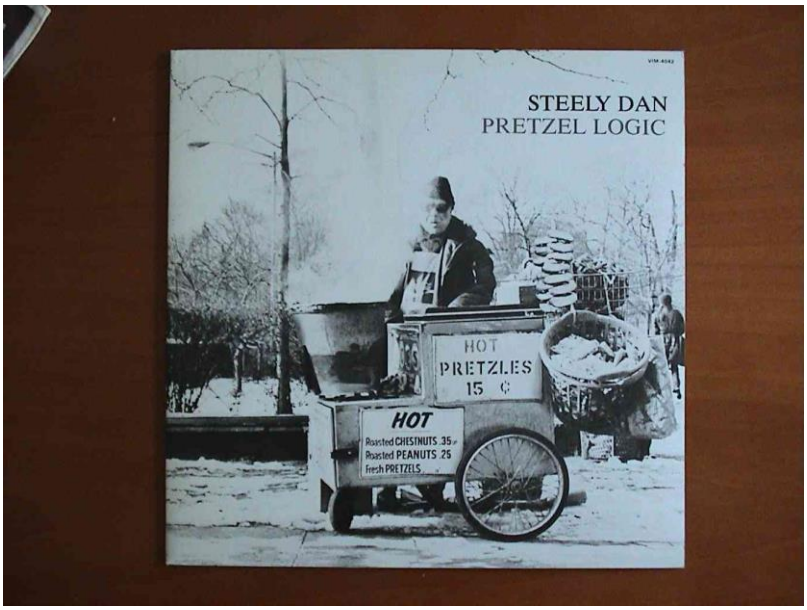


記念すべきスティーリー・ダンのデビューアルバム、「Can't Buy a Srill」。サイケデリックなジャケットが何とも印象的。発表当時の 1972 年のアメリカの雰囲気を見事に象徴しています。シングルチャートをかけ登った"Do it again"も、"Realing in the years"も、その後 FEN などで放送されるロック番組で週一回は必ずかかるほどのクラシックナンバーとなりました。小生がスティーリー・ダンを知ったのも、1974 年ごろに始めて作った1石ラジオのクリスタルイヤホンから聴こえてくる不思議なリズムに魅せられたのがきっかけです。この2つの名曲のほかのナンバーも、それぞれ彼等がデビュー前からあたためて来たコンセプトを一気に吐き出したがごとく、それぞれ粒ぞろいで、演奏も秀逸。例えばさきほど紹介した"Brooklyn"はこのアルバムにエントリーしていますが、ボーカルは David Palmer が担当。また、のちに Doo Bee Brothers の中核に

なったJeff Baxterのペダル・スティールギターがオルガンの代わりの主メロディーラインに採用されています。

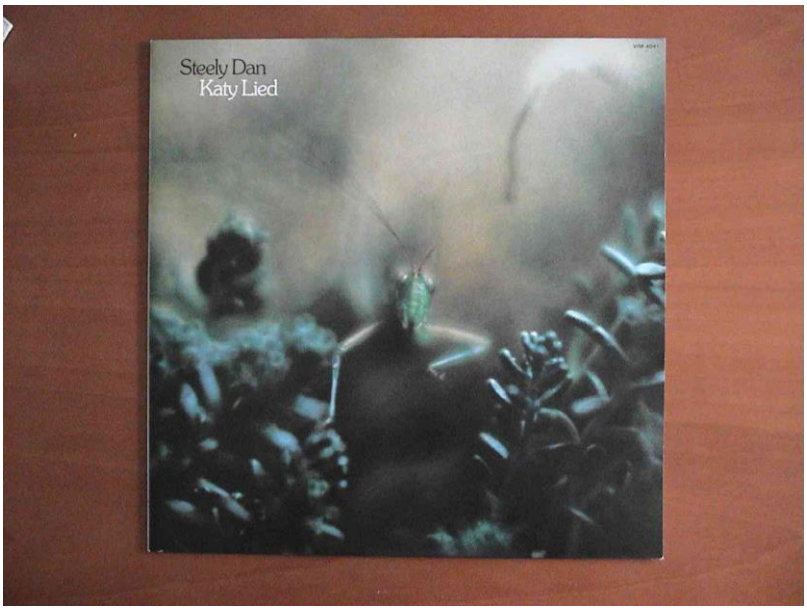


1973年発表の2作目、「Count Down to Ecstacy」。このジャケットに描かれた漫画の人たち、完璧にイってます。何とも危ない雰囲気。邦題は「菩薩」なんて名前が付いていたように記憶してます。A面1曲目のタイトル"Bodhisattva"を使ったのでしょうか。ジェフ・バクスターはこのアルバムにも参加。A面2曲目の"Razor Boy"、同じく3曲目の"The Boston Bag"がお勧め。



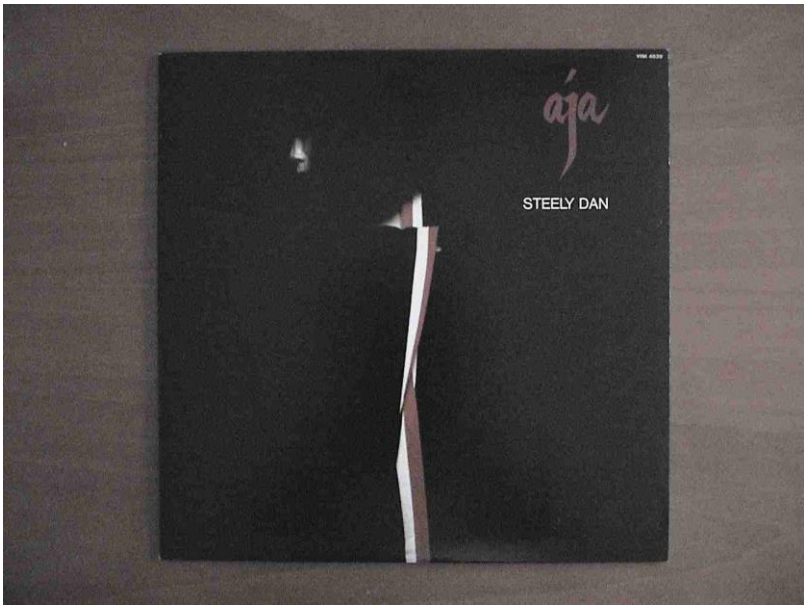
この3作目「Pretzel Logic」は、スティーリー・ダンの評価を不動とした記念すべきアルバムです。でも、邦題「さわやか革命」って、一体何なんだろう。このころ、洋物アルバムに邦題を付けていた人たちの考え方、おもしろいですね。ともあれ、なんと言っても、1曲目の"Rikki don't lose that number" (邦題:リキの電話番号)の大ヒットが貢献しています。イントロの低いマリンバ(だと思うんだけど)の響き。ピアノの主題に引っ張られておもむろに登場してくるギターの鳴き。支離滅裂なシチュエーションなのになぜだか物語性のある歌詞。全てが新鮮です。これがたまらなくて、小生は結局ヘビーメタル系とも、フォーク系とも、アイドル歌手とも、ぜんぜん無縁のティーンエイジを過ごすハメになりました。嗚呼！わが歪みの青春よ！おま

けに、今だってカラオケで歌えるナンバーが何もないじゃんか！結局イーグルスとか、ジェームス・テイラーとか、そんなところを歌って浮いてしまうんだよなあ。それにしても、このアルバムのクレジットに出てくるミュージシャンの顔ぶれの凄さは何でしょうか。ジェフ・ポーカロ(TOTO)やら、ティモシー・シュミット(Eagles)などなど。スティーリー・ダンの活動が、ミュージシャンの育成の場になっていたと言えるくらい。



75 年発表の「Katy Lied」(嘘つきケティ)。ここらへんから、彼等のサウンドがさらに玄人のジャズバンドっぽく進化してゆきます。まるでロックグループとは言い難くなってきます。それぞれのパートにキーミュージシャンを起用しての独特な音づくりが展開されます。例えば、ギターにラリー・カールトンやヒュー・マクラケン、ベースにチャック・レイニーやウィルトン・フェルダー、アルトサックスにフィル・ウッズ、といった具合です。ボーカルにマイケル・マクドナルドが初参加しているのも見のがせません。TOTO のメンバーもまたまた参加しています(ジェフ・ポーカロとデヴィッド・ペイチ)。A 面は"Black Friday", "Bad Sneakers", "Rose Darling", "Daddy don't live in that New Youk City no more", "Doctor Wu"、と息もつかせず名曲が並びますが、驚く程の完成度です。録音技術／機材にも最高のこだわりを詰め込んだ様子がクレジットに記されています。

76 年発表の「The RoyalScam」（幻想の摩天楼）。前作でがんばりすぎちゃったのでしょうか。このアルバムは少し力が抜けてるように思えます。それでも、B 面の″Hatian Devorce″はユーモアあふれるレゲエナンバーが入っていたりして、「スティーリー・ダンディズム」は少しも輝きを失っていません。



77 年発表の「Aja」（彩）。このアルバムを知らない人はあまりいないのじゃないかな。。。ここまで1年1作のペースでやってきた彼等ですが、全てのノウハウとテクノロジーをこの一枚に昇華させちまった、というできばえです。もちろん、この作品も、登場するミュージシャンの顔ぶれの豪華さはいよいよエスカレート。紹介するのもうっとおしいくらいです。ラインアップは、A 面 ″Black Cow″, ″Aja″, ″Deacon Blues″、B 面 ″Peg″, ″Home at last″, I got the news″, ″Josie″、の全7曲。このうち、″Aja″、″Deacon Blues″、″Peg″の計3曲がヒットチャート「American Top 40」をかけ登りました。小生はこのなかでも″Deacon Blues″が大好きです。酒場でしみじみウイスキーを傾ける元ミュージシャン、という情景が浮かんできます。余談ですが、77 年当時はイーグルスの「Hotel California」やフリートウッドマックの「Rumors」も流行っていた年だったと記憶しています。FEN ジャンキーになっていた小生は毎晩寝不足。大変印象の深い期間でした。これらの LP を入手したのはずっと後のことですが、耳から入ったフレーズや英語の発音は頭にこびりついていて、あとで歌詞カードを手にした時、発音と単語がやっと結びつきました。幸か不幸か、後になって自分で英語をしゃべらなければいけなくなったときにも抵抗を感じずにすみました。

80 年発表の「Gaucho」。前作「Aja」で本当に疲れちゃったのかな、とウワサになったほど、長い充電期間を置いてのリリース。皆、首を長くして、を通り越して忘れかけていました。このアルバムからも"Hey Nineteen"や、"Time out of mind"などがスマッシュヒットしました。地味ですが、A 面1曲目の"Babyron Sisters"などのように、分厚いベースやドラムスを聞かせてくれる秀作がちりばめられています。思えばこのころから、「キモチよい低音」に目覚めてアンプを自作しはじめたのでした。残念ながらこのアルバムを最後にスティーリー・ダンの活動は休止してしまいます。フェイゲン単独で「The Night Fly」、「Kamakiriad」といったすばらしいアルバムもその後リリースされましたが、彼等の青春期もまずは一段落というところでしょう。別に、おつきあい、というわけではありませんが、小生のティーンエイジもこのアルバムでピリオドを打ちました。

わが青春のスティーリー・ダン。ウエストコーストサウンド。(。。。って彼等は東海岸の出身ですが)2000 年リリースの最新作 "Two Against Nature"で彼等は再度復活を果たします。当然 CD でのリリースですが、どうだ参ったか！という音質です。LP 派もきっとお気に入りになるはずです。未だに衰え知らぬ「自然に逆らう二人」。このこだわりオジサンたちのサウンドを聞いているとこっちも元気がでてきます。(Part 5.1 の終わり：2002.10.05)

マーラーにハマるの巻

クラシックなんか見向きもしなかったとおるさんですが、ここへ来てハマった。折しも金田明彦センセのアンプ試聴会でレコード演奏と相成った「マーラーの3番」（メータ指揮）の第6楽章で不覚にも涙が出てしまったのが運のつきです。初めて耳にした音楽なのに、心を揺さぶるこの感動は何だ？準 DC（純ではない）制御の SP-10 がとおるさん家のメインプレーヤになってからというもの、CD には目もくれず、LP 集めがすっかり楽しみになり、かつクラシック／シンフォニーの音の厚さに目覚めはじめたちょうどその頃でした。大体、基礎知識が何も無いところから闇雲に LP を入手してもがっかりすることが多かったのですが、マーラーの前半作品は特に一貫性が高く、どれもすばらしいものばかりです。オークションや、お茶の水通いの果てに、たちまち古レコードが増えてしまいました。

ワルター指揮のマーラー1番「巨人」。小生は全く知りませんでしたが、おそらくビートルズの Let It Be 級に有名なジャケットなんでしょう。最近のオーディオ誌でもこのレコードに関する評論を見かけました。低音が重厚です。バーンスタイン指揮の1番の方を先に購入したのですが、マーラーの作品にはこれでエントリーしました。金管のきらめきと、弾け散る旋律に圧倒されました。

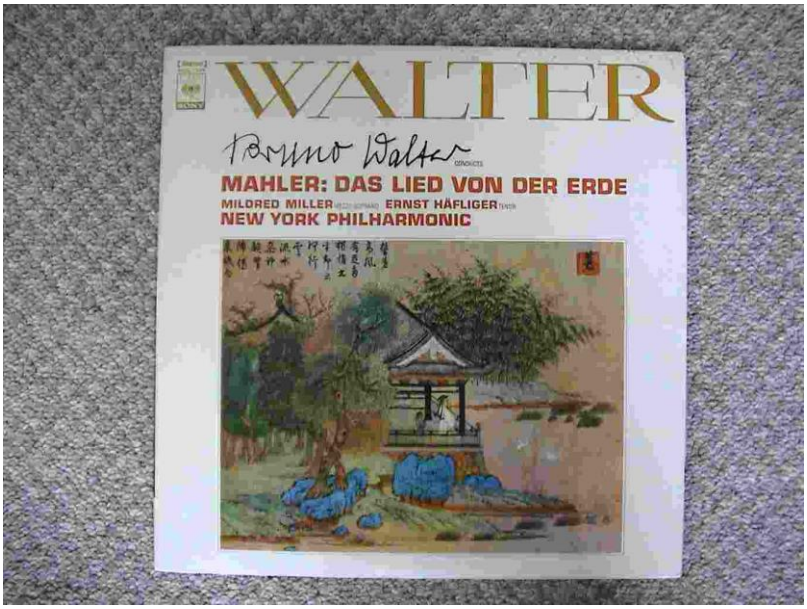
同じくワルター指揮の2番「復活」。ブルーノおじさんのアップには若干引きますが、これも内容は濃いので参りました。とおるさんは勉強不足なのでこの曲でもって何をマーラーが訴えかけているのか未だによく分かりません。ともあれ気分で盛り上がって聴いております。最近また長距離通勤をはじめましたが、毎朝の電車の中ではクレンペラー指揮の2番を CD を聴いております。ヘッドホンでバリバリ鳴らしていると、何やら精神が高揚してまいります。（うーむ。近所迷惑だよなあ。。。）

これは、ショルティ指揮の3番。とおるさんの涙がでちゃったメータ指揮の LP は色々探しましたが入手困難。見つかっても大変高額なので CD 版でがまんです。それにしても、このショルティ指揮の LP も感動ものです。導入部のホルン、ティンパニーの重厚さは絶品。そして、あの妙なる6楽章の調べも、クライマックスも、何度聴いてもジンと来ます。フト考えたのですが、「このサビはロックンロールだ！」。仕事で精魂抜かれて帰ってきても、こいつを聴くと元気を注入してもらえる気持ちがします。もう一枚、クーベリック指揮の演奏も手に入ったので聴いてみました。こちらは、各楽器の分離が良く、合唱部分も語尾が明瞭に聴こえますが、その分低音域の厚みが少々不足な気がしました。もっとも、比較すべきは各指揮者がどんな思い入れを込めて曲を彩っているか、ということであるべきです。とおるさんはついつい、オーディオ装置がどう鳴っているか、が気になってしまいます。

かのズービン・メータが指揮棒を振った「4番」。まだ聴き込んでいませんが、先の3作に比べ、表情が柔らかい、という印象の曲です。演奏時間もLP1枚で納まっており、そんなに身構えずに楽しむことができます。このデッカ盤にしても、さきほどのショルティの演奏が収められたロンドンレコード盤にしても、心なしか盤の重量感があって、録音も低音側に重心が寄っているような気がします。

この5番の有名な第4楽章のみは、クラシックと没交渉だったとおるさんですら、何度か耳にしたことがあります。しかし、マーラーの曲だとは知りませんでした。金田アンプのファンが良く口にする、マーラーの音楽とはどんなものだろう？というので、まずはCDで発売されたサイモン・ラトル氏指揮の5番を聴いた時、「ああ、この曲だったんだ！」と嬉しくなりました。そのサビの第4楽章に至るまで、長い長い導入で引っ張りますが、1楽章のしょっぱなのトランペット独奏は大変印象的。あれを吹かされるヒトはさぞかし緊張するだろうなあ、などと思ってしまいます。最近は帰宅後に5番をかけると、3楽章まで盛り上がりに盛り上がって、4楽章が始まったとたんにコテっと眠りに落ちてしまいます。まるでパブロフの犬的な反応です。第5楽章のクライマックスが訪れると、ハテと我に返る有り様です。

6番を飛ばして交響曲第 7 番。「夜の歌」というのだそうですが、入手した LP はアブラヴァネル指揮、ユタフィルハーモニック。まだ聴きはじめてあまり日が経っていません。慣れるまでちょっと時間がかかりそうだな。少し難しい気がしましたが、クライマックスの持って行き方はマーラーそのものです。



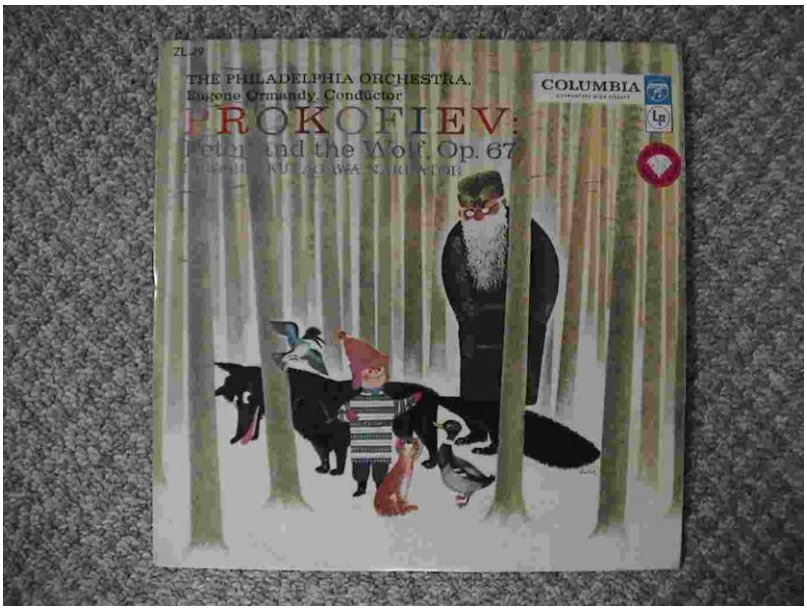
ワルター指揮の、「大地の歌」。10 代のころ読んだヘルマン・ヘッセの詩文を思い出します。そのときのなんとなく青臭い、切ない気分まで思い出しそうだ。

不景気も、不透明な政治も、頻発するテロとその報復劇も、この世紀の病める心は巷に満ちあふれています。おおよそ一世紀前の音楽家が曲に託した「大地の声」とは何だったのでしょう？百年に近い時空は、この地上に根を張る人間にとっては大きな隔たりです。それ故に百年たった今でも、かつてと同じ過ちを結局は繰り返すのでしょうか。それでもその苦しみや、つかの間の喜びを、人は大地の上で歌い、奏で続ける。神様は見てみぬふり？それとも大地が終わるその日まで、そっと見守ってくれているつもり？（Part 5.2 の終わり：2003.10.18）

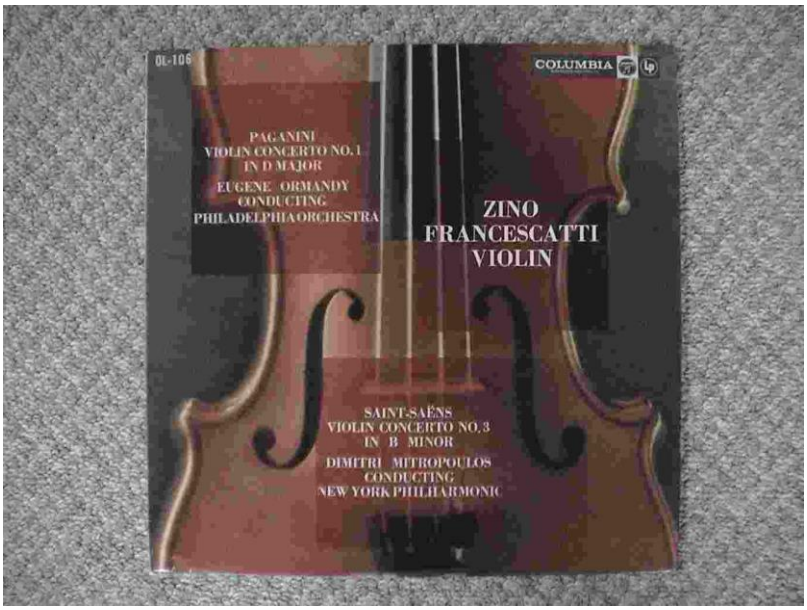
その他ディスクな者ども1

ただ今マーラーの LP はさらに増殖中。ですが、むかーしのそのまたむかーし、クラシックのレコードに親しんでいたコトもないわけではなかったのです。聞き覚えはあるが、作曲家は誰で、何と言う曲名か、わからずそのままにしておりました。最近になって、実家の押し入れから出てきたもの、つい最近、興味本位に集めたもの、など、並べてみました。

とおるさんのおやじ殿は、きよしさん、といいますが、とおるさんがまだガキんちょのころ、大変嬉しそうに家に持って帰ってきたレコードがこれです。カラヤン指揮の「ヴァイオリンコンチェルト」。きよしさんはこの曲が大変お気に入りで、週末ともなると、このレコードの乗った東芝製ステレオ電蓄は、いつも楽しげに歌っておりました。「んーな古レコード、どーすんだ？」という、きよしさんの声を尻目に、押し入れの中から引っぱり出したコイツをとおるさん家に持ち帰り、今度は 21 世紀に蘇ったサイボーグ SP-10 にて再生、と相成ったのでありました。さすがに傷だらけで、プチプチと特有のノイズは目立ちますが、かつて聞き覚えのある旋律が見事に拡がります。いいもんだなあ。



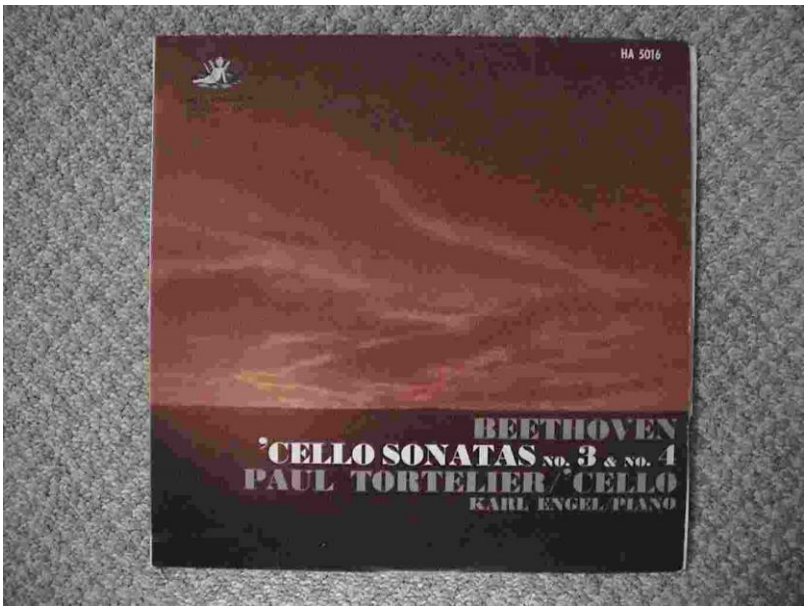
同じく押し入れから出てきたプロコフィエフの「ピーターとおおかみ」。オーマンディ指揮、ナレーションは芥川比呂志さんです。とおるさんのオク様も、「これは聞いたことがある」と言ってました。使われている楽器が登場するキャラクターのそれぞれになぞらえてあり、子供の情操／音楽教育に役立つ、ということでもてはやされたのかも知れません。絵本付きだったように思えます。



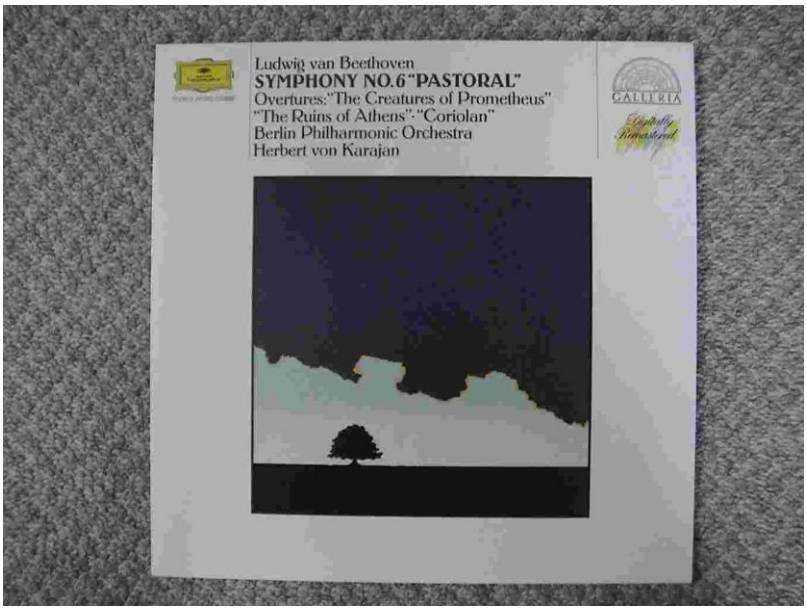
サン・サーンス作曲のヴァイオリン協奏曲３番。これまた傷だらけでしたが、先のベートーベン作品 61 番と代わりばんこにしょっちゅうかかっておりました。あらためて聞いてみると、弦の音色の鮮度に驚きます。

これは、最近古レコード屋さんでみつけた、キョンファのサン・サーンス。この方のヴァイオリンを初めて聞きましたが、前記のレコードよりもさらに強靭かつ鮮烈な音色に、すっかり驚きました。前の持ち主が大変大事にしていた様子で、紙ジャケットをプラスチックのシートで丁寧にラップしてありました。

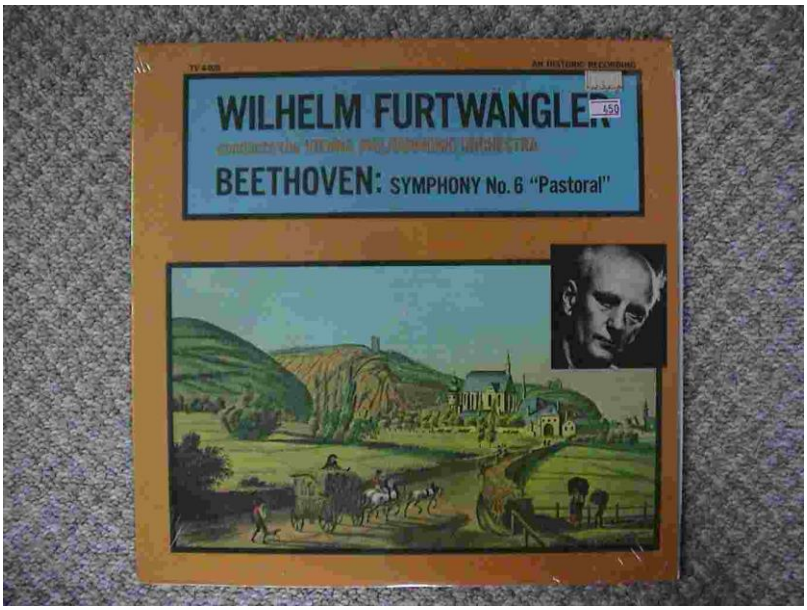
ニコラエワ演奏による、バッハのピアノ曲集。楽曲と演奏そのものも楽しめますが、ハッとする程みずみずしい音が入っているので、カートリッジやイコライザアンプの回路を変えるときのテスト音源に使っています。最初アルカリ電池駆動していた頃の SP-10 で、ニコラエワさんが鍵盤にグっと乗り出す時の、「衣擦れ」のような音が聴こえた気がしたんですが。。。。気のせいかな。



ベートーヴェンのチェロソナタ。録音が古すぎた。SP 盤からの焼き直しなのかもしれない。低音の響きは申し分ないんですが、他の御同好の方が良く言われる、「胴鳴り」というヤツを体験するには至りませんでした。ジャケットから出してみたら、厚みと重みのある「赤盤」でした。半透明の赤い色をしげしげと眺めていたら、子供の頃見たことのある「ソノシート」を思い起こしました。



どこぞの焼酎醸造元が、熟成中のタルに聴かせると言う、「6番：田園」。カラヤン指揮による、1980 年代の録音です。もちろん皆様御存じの有名な曲ですが、恥ずかしながらとおるさんがじっくり聞いたのは、ごく最近、LP 集めが始まってからです。ほのぼのと、豊かな気持ちになります。自分が焼酎でなくても、「熟成してちょー」と言いたくなります。



こちらはフルトヴェングラーのベートーヴェン6番です。もちろん、半世紀以上前の録音で、古い電蓄の奥から聴こえてくるような、懐かしい音色です。S/N も悪いし、個別の楽器の分離など望むべくもありませんが、オーディオ再生という次元を超えて、何か感動的な演奏です。聴衆が畢生の名指揮者の一挙手一投足に惹きつけられている様子がじわっと伝わるのです。咳払いなどが混じっているせいでしょうか、ライブ感たっぷりです。

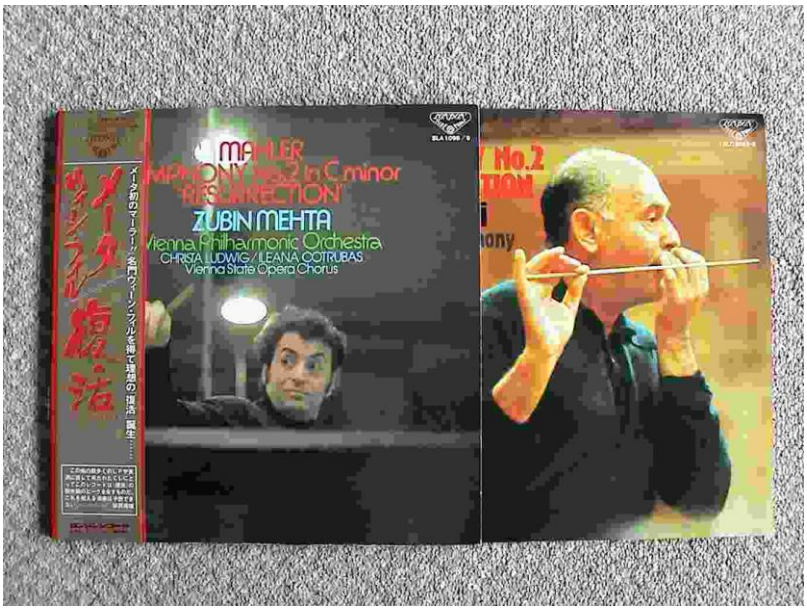
しばらくとおるさんの古レコード熱はおさまりそうにありません。フルトヴェングラーのレコードを聞いてて思ったのですが、写真にも、ビデオにも撮れない、「その場」の雰囲気が再現できる、ってのはすばらしい。クラシックに限らず、ジャズの名演奏／名録音もまた然り。（Part 5.3 の終わり：2004.1.24）

もっとマーラー！

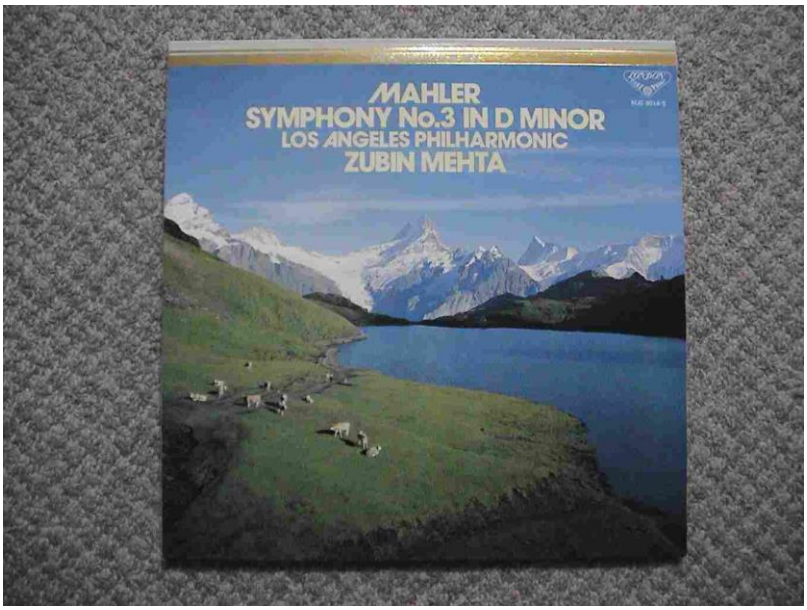
もっとマーラー！ってなわけで、完全に逃れられなくなりました。演奏に込められた情感を採るか、録音に込められたリアリティを採るか。集めたレコードをとっかえひっかえ、いっつも同じ曲（ボーっと聴いているとそう思えるよね）を聴いているので、とおるさんのオクさん／お嬢ともに、あきれ顔です。

コロンビアレコードのバーンスタインシリーズ。ニューヨークフィルを指揮した、1番「巨人」、6 番「悲劇的」、そして畢生の名作9番、が入っています。1番は、若きマーラーの「人生これから！」とも言いたげな気持ちの高まりが感じられます。また、6 番は歩みの中盤にしてカベに行き当たったとも言えそうな、複雑かつ苦し気な曲想に満ちています。一方、9番の終楽章は、「マーラーはこの世に別れを告げ、雲が青空に溶け行くように」と、まさにワルターが評したとおりのエンディング。1番の若々しさとあまりに対照的ですが、バーンスタインはこれら楽曲に見事に命を吹き込んでいるようです。録音のクオリティに欲を出すとキリが無いですが、曲の流れと雰囲気はピカいちです。

同じくバーンスタインの2および3番。ショルティの演奏と合わせ、この3番が気に入ってます。3番最終の6 楽章の盛り上げかたはバーンスタインならでは。70 年代に収録されたと思われるウイーンフィルのビデオ（DVD に再録）では、台上、感情のおもむくままに指揮棒をあやつるバーンスタインの姿にお目にかかれます。

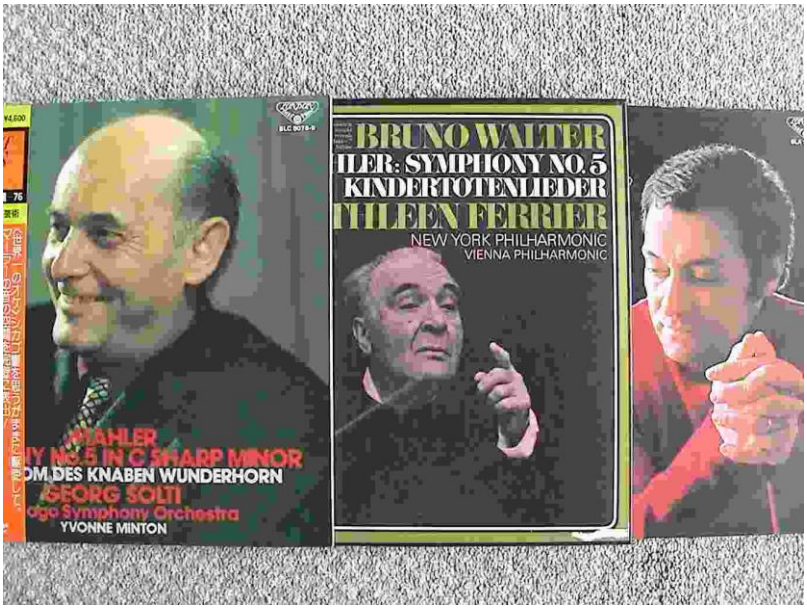


メータ指揮（ウイーンフィル）の2番、およびショルティ指揮（ロンドンフィル）の2番。オリジナルはデッカ盤なんでしょうが、ロンドンレコード→キング、と受け継がれてプレスされたものを入手しました。どちらもしっかりカッティングされている様子で、低音がビシっと入っています。どちらかというと、「録音のクオリティを楽しむ」ために聴いてます。「復活」というテーマが引っ張っているのでしょうか、クレンペラーやワルターといった大御所の演奏のほうが心なしか貫禄で勝っているような。。。。最近何かの CD ジャケットで見かけたメータさん、この頃に比べて先輩達に負けない貫禄が出てきたようにも思えます。これからもがんばってください♪

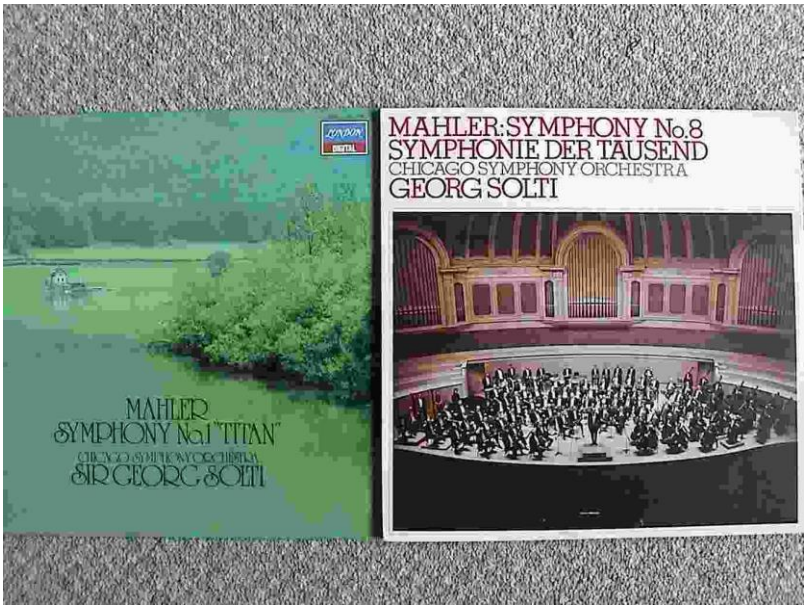


やっとお目にかかれました！メータ指揮（ロスアンゼルスフィルハーモニック）の 3 番。「スーパーアナログディスク」盤です。「金田式 DC アンプ」の試聴会で初対面、とおるさんの印象に残ったのでありました。

後々聴くところによると、「長岡師匠御推薦盤」にもリストアップされているそうです。だから、というわけではないのですが、その演奏／録音のすばらしさを体験したいと思い、まずは CD を購入して楽しんでいました。今回念願の LP で聴いてみたところ、やはり奥行きの深さ、情感のみずみずしさに触れて感動を新たにしました。ちょっと大袈裟かな。今後もし機会があれば、ぜひ「生メータ＋生マーラー」を体験したいものです。

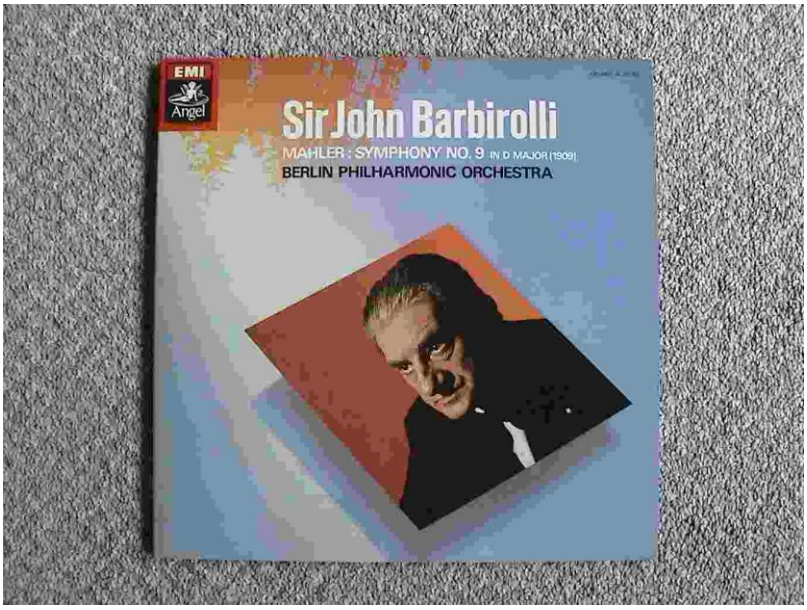


クーベリックの 5 番を皮切りに、フト気がついたら3世代の指揮者の手になる「5 番」が集まっちゃった。ワルターの 5 番は、さすがに録音の古さからか、それとも熟練の為せる技か、両脇の後輩の演奏に比較すると思いきりカドがとれて聴こえます。でも有名な4楽章のリリシズムはマーラー直伝なんでしょうか？素晴らしいです。メータ盤の4楽章はちょっとおとなしい。音量を抑えすぎているような印象。ショルティの 5 番、いちど聴きたいと思っていたのですが、シカゴ饗のブラスが堪能できます。



ネットで衝動買いしちゃったショルティの１番および8番。ちょっと失敗。１番はディジタル録音盤です。DECCA のロゴに惹かれたのですが、アナログ録音よりずっとクオリティが落ちて聴こえます。一方、8番

「千人の交響曲」。盤質が今一つでした。せっかく手に入れたのに親しめない。とおるさん未踏破は、この8番のほか、4番および 7 番。曲は逃げないので、そのうちじっくり聴くことにしましょう。



バーンスタインの9番もすごいですが、このバルビローリの9番も歴史に残る名演かもしれない。演奏はベルリンフィル、ベルリン近郊の教会で 1964 年に収録されたそうです。演奏に込められた感情と、録音のクオリティが揃ったのをとおるさんが体験したのは、この1枚が初めてです。今度 CD も聴いてみよう。

あとで気がついたんですが、マーラーと小生はちょうど百歳違う。小生の今の年ごろ、ちょうど一世紀前、かの悩める作曲家は「悲劇的」を書いていたかもしれない。だからどうってこともないんですが、ビミョーに感情移入してしまいます。とおるさんの場合、目下はリラクゼーションのクラシックではなく、センティメントのクラシックになってしまっている。時と共にいずれまた好みはうつろうのかも知れませんが、今は今。この間も出張先のロンドンの街角で思わずデッカ盤を衝動買いしてしまったとおるさんでした。(Part 5.4 の終わり:2004.5.17)

なおまだマーラー！

とおるさんの奥様の「ふーん。。。」といいたげな横目を避けつつ、ポチポチと買っていたら、増えるは増えるは。なおなおマーラさんのレコードと CD。も一写真をとるのも面倒なので、リストアップのみにて御紹介。順不同でんす。小生の感想はあくまで素人の他愛無い歓声だとおもって聞き流して下さい。「へええー、ほほうー」ってなもんで、あまり深い意味はござんせん。

ジェームズ・レヴァイン指揮、9番：　ミュンヘン・フィルハーモニック、2004 年のライブ録音です。荘厳な雰囲気で長大な1楽章が幕をあけるが、情感たっぷりな4楽章もいつかフィナーレを迎え、聴衆が、しばし消え行く弦の余韻を惜しみつつ固唾をのむ間合いが最後にやってきます。やがて気がついたように熱狂的な拍手を炸裂させる瞬間まで、ライブならではの緊張感をもって収められています。奥行きもそれなりにあり、好感のもてる CD です。（OEHMS Classic: OC-503）

エリアフ・インバル指揮、6番「悲劇的」：　フランクフルト放送交響楽団、1986 年収録。オリジナルはデンオンの PCM 録音です。CD 復刻版（DENON: COCO-70475~6)を入手しました。クリアな音質ですが、若干低域に線の細さを感じました。（あくまで小生の私見）ハンマーの一撃に心臓が飛び出るほどびっくりさせられます。ムチはうなるは、カウベルがさざめくは、何でもありの独特な曲調です。この曲を書いたころのマーラーさん、若干壊れ気味だったのかな。。。（失礼！）

ズービン・メータ指揮、5番：　1989 年、ニュヨークフィルを率いて録音したものです。CD のジャケットにはメータさんの横顔が写っていますが、鬢の辺りに白いものが。ベテランの域に入ったんですね。厚みはありますが、ちょっと落ち着きすぎの演奏のようです。録音のせいかもしれない。（Warner Music Japan, WPCS-21020）

小林研一郎指揮、3番：　チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、1999 年プラハ、ドヴォルザークホールにての録音。これはお見事！ホールいっぱいに拡がるブラス、地をゆるがすティンパニー、とオーディオの愉しみを目一杯堪能できました。音質のみではなく、演奏と曲の流れも優れていると思いました。さらに特徴的なのは、曲間を彩る「うみみみみー！んむむむむー！」という迫力あるコバケン節です。第6楽章のフィナーレはそれも自然に溶け込み、すばらしいクライマックスに転じます。SACD ハイブリッド版ですので、5ch サラウンドシステムをお持ちの方にはさらにお楽しみの一枚かも。小生のシステムは頑固に 2ch ステレオですが、それでも十分奥行きの深い録音です。（Exton, OVCL-00182）

リカルド・シャイー指揮、9番：　バルビローリの演奏に比べ、ずいぶんたっぷりとリズムを見計らった、じっくりしたタクトのようです。一番最初に聴いた時、「うわー、すごくテンポが遅い！」と思ったのですが、聴き慣れるとそうでもありません。シャイーが 2004 年にロイヤルコンセルトヘボウを去るにあたって、特別に思い入れを込めて演奏したとのこと。けだし名演奏です。また、ティンパニーが極めて印象的にアレンジされています。1楽章の途中で迎えるフォルテシモの部分を再生中、床ごとの「ずどどどどど」という振動を感じます。とおるさん家のスピーカーはそれほど超低音まで延びていないのですが。。。ピアニシモの領域は極端に音量が抑えられており（シャイーがそのように指揮したのでしょうか）、ダイナミックレンジの良いシステムでないと、これは辛い！って思います。（DECCA, UCCD-1125/6）

上記は CD。最新録音にはすばらしいものが多いです。絶頂期のアナログ録音／LP との比較論をよく見ますが、ディジタル録音技術も決して歩みを止めてはいないのだなと実感できます。ホンモノの演奏こそが永遠のリファレンスなんですけど。。。。以下はその後とおるさん家のタンスの空きスペースを徐々に埋めつつある中古 LP 群です。じきにどこにも置き場所が無くなってしまう。言いたかないが、LP はやっぱり厄介だ！

ゲオルグ・ショルティ指揮、1／2／3番：　「わーい、デッカ盤だ！」と思わずオークションで衝動買いしてしまった LP のファイルです。ショルティが収録したマーラー・チクルスの一部なのでしょう。古い盤で、音質はマアマアでした。ロンドンシンフォニーオーケストラによる、1964-1969 年の録音です。3番は、これより前、キングレコードのものを別途聴き込んでいましたので、奇しくもプレスの出来映えを比較することになりました。違いは、小生ごときには良く判らない、ってところです。マスターテープの段階で、適度にコンプレッサーがかかっているのかもしれませんが、6楽章の最大級のティンパニーのところで、あからさまに音量

が下がります。これは、キング盤でも同じでした。ちょっと興醒めですが、そのまま録音したら、きっと針が飛んでしまうのでしょう。レコードの内周部分にさしかかっており、歪みの点でも不利なのかもしれません。(DECCA, 7BB-173~177)

パウル・クレツキー指揮、1番「巨人」:　お茶の水のレコードユニオンで何気なく手にしてそのまま購入。ウイーンフィルの演奏。ジャケット裏面に、マーラーの楽曲を取り巻く歴史的な解説がていねいに書かれており、とってもタメになりました。(東芝 EMI、「永遠のクラシックライブラリー47」、 KC-147)

ショルティ指揮、7番「夜の歌」:　とおるさんには、導入部分はふくろうの鳴き声を連想させます。どーもまだ馴染めない。結局まだ聴き終わってないんですよ。(ロンドンレコード、L30C-2106/7)

レオポルド・ルードヴィヒ指揮、9番:　ロンドンの街角で仕入れた、ロンドンシンフォニーオーケストラによる録音。年代もわからないし、「The World Record Club Limited」というレーベルも聞いたことない。あまりに古すぎるためか、盤質はお世辞にも良いとはいえないです。しかし、古いものを大事にするイギリス人に敬意を評してありがたくコレクションに加えさせていただきました。しめて4ポンド也。 →→→ って書いた後、あらためてこの謎のレコードを聴いてみました。前言撤回！若干のプチノイズに目をつぶれば、これはすばらしい録音／演奏であると思います。言葉では表現できないのが惜しい！バイオリンの響きが特に美しく、ブラスセクションの分離も明瞭です。低音は量感よりも奥行き重視で雰囲気が出ています。各楽章が LP 片面に余裕をもって2枚にわけて贅沢にカッティングされており、盤も重量級です。この指揮者は、全く手を抜かずに曲をかみしめて運んでいるようで、非常にていねいな演奏であると感じました。。。

サー・ジョン・バルビローリ指揮、5番:　これはつい最近、お茶の水でめっけました。めっけものだった。バルビローリの9番に感動したとおるさんでしたが、サー・ジョンの 5 番は如何なるものなりや、と針を落としましたが、期待に違わず、高音質、名演奏。これだからアナログはやめられない。ニュー・フィルハーモニア・オーケストラを率いて、1969 年に行われた演奏です。この翌年、サー・ジョンはあの世に旅立ってしまうのですが、熟練の熱演が針を通じて偲ばれます。

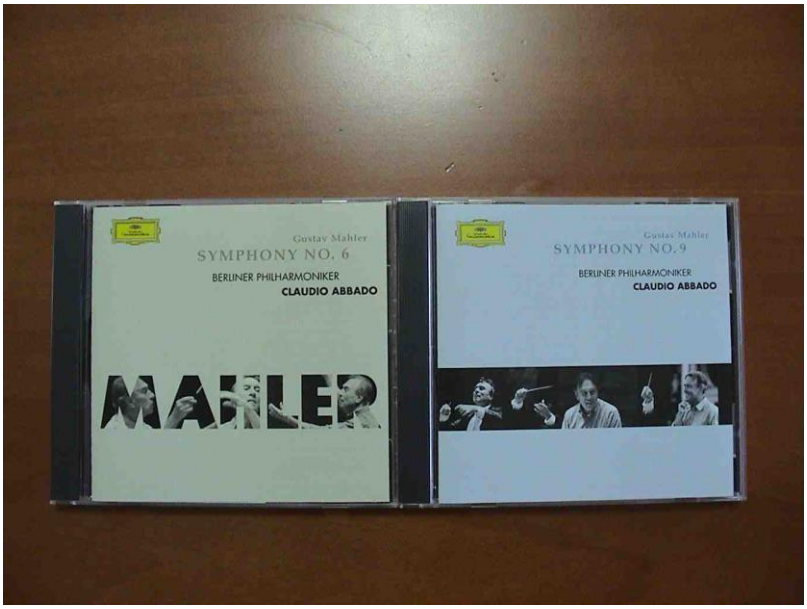
なんだか、まだまだマーラー行脚は続きそう。クラシック CD のコーナーでも気のせいか、マーラーの作品は数多く並んでいるような気がする。少し人気が出ているのかな。オーディオ雑誌の新譜紹介でも必ず目にします。マーラーを起点に、少しずつ他の作曲家／作品にも手を出し始めています。今年はブラームスあたりが気になっています。フルトヴェングラーの古い録音(SP からの焼き直し版でしょう)で、ブラームスの3番を聞いてみましたが、録音のクオリティなんかをブッ超えて、心を揺るがすなにかを伝えてくれます。聴衆の盛大なせき払いがお構い無しに入っていますが、一発録音じゃしょうがないですよね。20 世紀前半は、みんな健康状態も良くなかったのかも。それでも、心の充足をもとめて、名演奏に耳を傾けたいと思い、人々がコンサートホールに詰め掛けている。そんな熱気が感じられます。(Part 5.5 の終わり: 2005.04.02)

ビバ！クラシック:その1

マーラーの交響曲から、突如クラシックにエントリーしてしまったとおるさんですが、その後も興味にまかせて色んなディスクを(アナログも、ディジタルも)手当りしだいに仕入れ続けております。クラシックの旋律を聴き慣れたせいか、はたまた金田式アンプや、38cm ウーハーの追加で音の聴こえ方が変わったせいか、あるいはまた年齢のなせるわざか、も一何がなんだかわかりませんが、ともかく、こんなにも人間の中身を豊かにさせてくれる音楽がまだまだ世の中にあるのだと思うと、嬉しくってしょうがない。フト見渡すとどうやら最近はクラシックブームに回帰しているのだとか。ホルストの「惑星」組曲は J-POP に取り上げられているようだし、映画の世界でもサントラに取り上げられる主題もよーく聴くとクラシックの名曲のフレーズを巧みに利用しているように思います。最近気が付いた例では、ラッセル・クロウ主演の「グラディエーター」の導入の戦闘シーンには、「火星」に

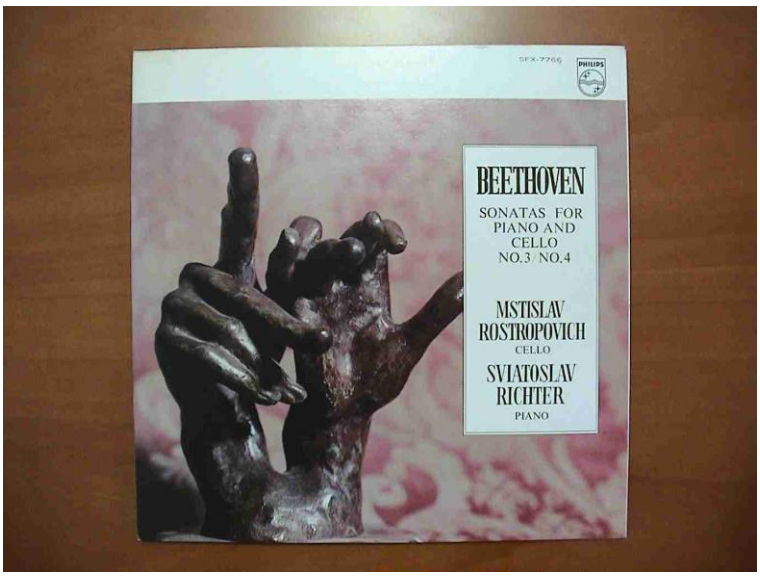
良く似た旋律が起用されています。「ベン・ハー」を見ましたが、ゴルゴダの十字架の直後に降り注ぐ雷雨で世界が洗い浄められるシーンの裏に流れる主題は、マーラーの第2交響曲を連想させます。今年はヨーヨー・マが監修をした「シルクロード 2005」が話題となり、とおるさんも CD を早速視聴しましたが、弦楽器の起源が古代アジアの歴史や民族が語り継ぐ調べと深く関わっていることをはっきりと認識させ、何やら身体の奥深いところから共鳴させてくれるのはホントに不思議です。このページでは最近手にしたソフトのなかで印象に残ったものを順不同に紹介しようと思います。

ジェームズ・レヴァイン指揮、マーラー9番：　ごく最近の新しい録音（レヴァイン＋ミュンヘンフィル：2004 年）の試聴記を紹介しましたが、こちらはそれを遡ること四半世紀、1979 年録音のフィラデルフィア管との名演！LP を藤沢の中古レコード屋さんで見つけました。CD で聴くよりもより重厚なアダージオにすっかり感動しました。最近とおるさんの涙腺が若干ゆるくなっているせいか、なんだか勝手に溢れ出てくるものをかなぐって聴いています。とても家族の前でリスニングできない。まだ 30 代のレヴァインが真正面からこの曲の真髄に迫ろうとしている様子は驚くべきです。（RCA: RVC-2302/03）

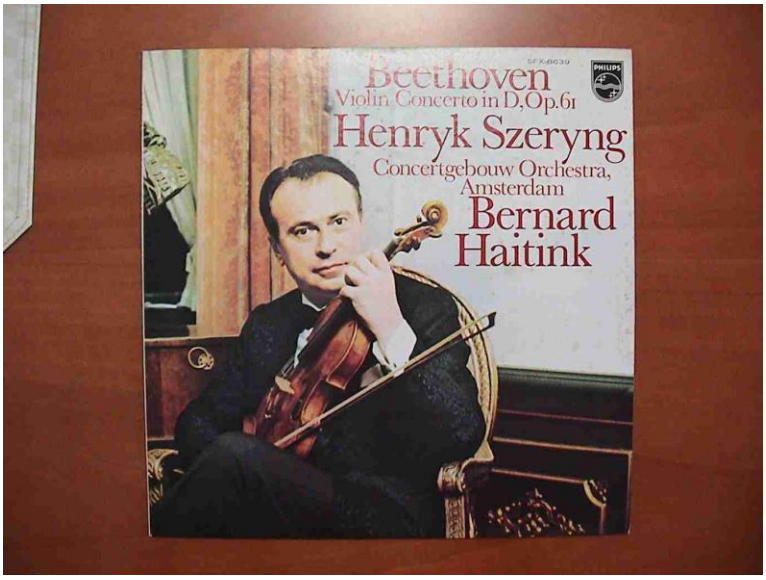


クラウディオ・アバド指揮、マーラー6番「悲劇的」および9番：　両方ともベルリンフィルとの共演・ライブ録音です。（6番：2004 年 6 月、9番：1999 年 9 月）アバドの6番を聴いて、それまで持っていたこの曲のイメージが少し変わりました。2楽章と 3 楽章の順番が入れ代わっているせいでしょうか。前半はこれまで聴いた他の演奏よりもおだやかに、叙情的に響きます。それだけ、

後半の曲想（運命の転変、諦観）がコントラストになる感じです。あいかわらず、最後のティンパニーにはハラハラさせられますが、節度をもった締めくくりではあります。一方9番ですが、ライブなのによくもまあこれだけ S/N 比の高い演奏会だったのであろうと感心しました。先日出張のおり、たまたまベルリン市内に宿泊したホテルがベルリンフィルのちょうどすぐ近くにあったので、「なーるほど、これがベルリンフィルか」と思いを馳せたのでありました。これを会社の同僚で、アマオケのコンサートマスターをつとめる友人に話したところ、どうやらまさにベルリンでのアバドのこの演奏を聴いたのだと言っておりました。後ろの立ち見席のチケットしか入手できなかったそうですが、身動き一つもためらわれるような緊張感に満ちたライブだったとか。。。アバドが指揮棒をおろしても張り詰めた静寂が破られず、拍手喝采になって自分の手のひらがびっしょり汗をかいているのに気がついた、んだそうです。この CD を聴くと、なるほどそんな様子が目に見えるようです。（グラモフォン CD：6 番／UCCG-1250、9 番／UCCG-1106）



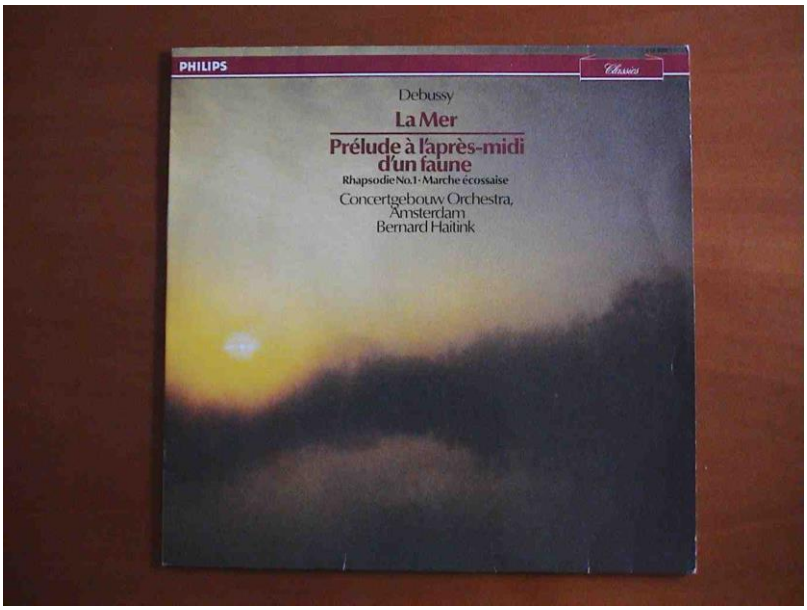
ロストロポーヴィッチ＋リヒテル演奏：ベートーヴェン作ピアノ・チェロソナタ 3 番／4番　ヴェートーベンのピアノ・チェロソナタを色々聴いてみたのですが、一番気に入っているのがこの LP です。コンビのピアニストはリヒテルです。チェロの音色が実に生々しく、しかもとことん深々と響きます。フィリップスの中古レコードを何気なく購入したのですが、大当たり。これを聴いてしまうとやっぱり CD とは違うなあと感じます。フィリップスとか、ウエストミンスターとかのレーベルのカッティングは本当に気合いが入っています。録音エンジニア魂と言うか、なんと言うのか。。。（フィリップス LP：SFX-7766）



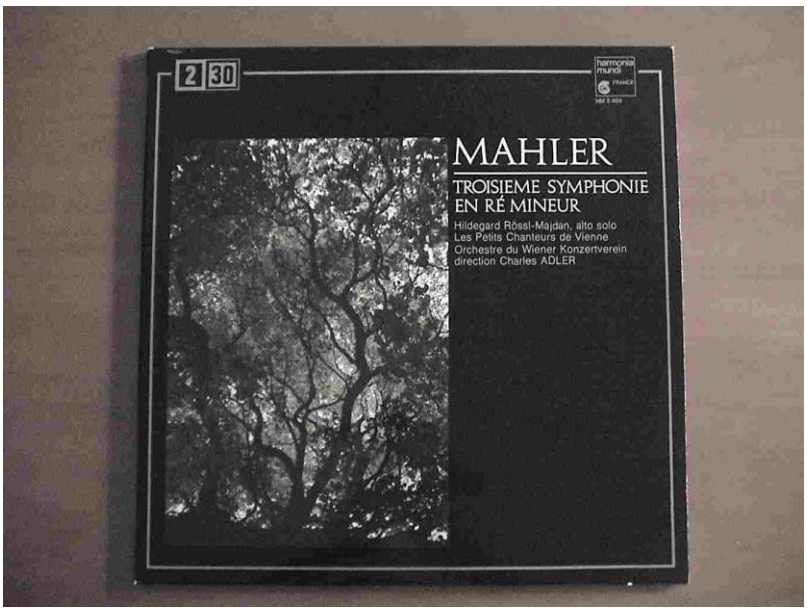
ハイティンク指揮／シェリング演奏：ベートーヴェン作バイオリン協奏曲 OP61　子供の頃よく聴いたカラヤン指揮の同曲ですが、これまでバーンスタイン＋アイザック・スターン、千住真理子、などなど聴いてきてやっと行き着いたのがこれ。やはりフィリップスの LP じゃ、という先入観もあるのかもしれませんが、本当にみずみずしい響き、しっとりとした流れです。オーケストラの低音域もきちんと記録されている。（フィリップス LP：SFX-8639）

バーンスタイン＋ウイーンフィル、ベートーヴェン6番「田園」：　グラモフォンの古い LP を国内プレスで仕入れて聴くと、どれもこれも判で押したように腰高な演奏に聞こえるので変だな、と思っていました。たまたまロンドンの街角で見つけたベーム演奏の「田園」は、グラモフォン LP でしたが、こちらは重厚な響きがする。詳しいお方に事情を伺うと、やはりそれはある、とのこと。日本でプレスした LP は、ビニールの材質などの微妙な違いで、オリジナルプレスとは異なった音質になるのだそうな。。。前置きが長くなりましたが、というわけで、「田園」を CD で気軽に聴けないものかと思っていたら、ありました。やっぱりこの人だ。バーンスタインの演奏、「濃いー」です。自然の温もりに素直に浸れる感じの名演奏。（UCCG-4085）これに味をしめて、バーンスタインとウイーンフィルが録音したベートーヴェンの交響曲全集を、同じくグラモフォン CD から出ている「コレクターズ・エディション」で衝動買いしちゃいました。だって安上がりなんだもん、って、あれれ、何か響きが違う。同じ「ムジークフェライン大ホール」の演奏なのに。。。どうやら CD もプレスロット依存、という現象があるようだ。これはやっぱり LP も見つけなきゃ。

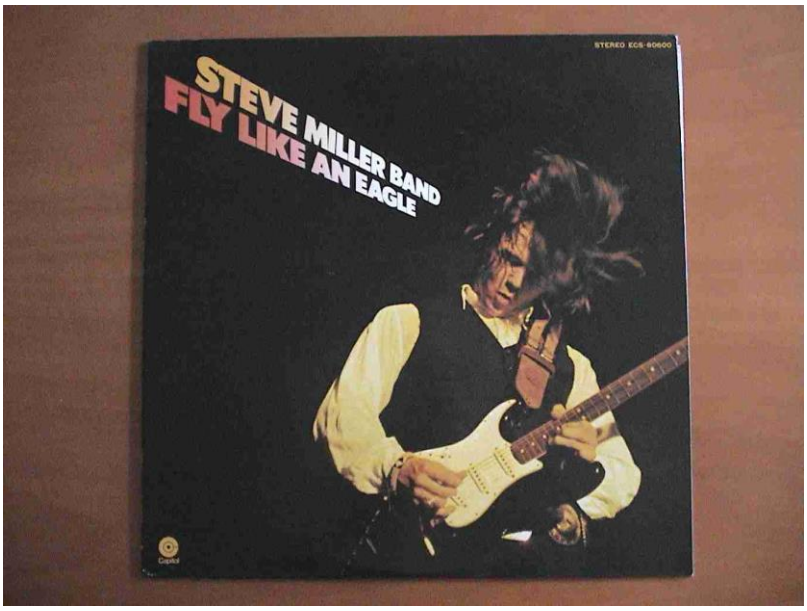
オーマンディ＋フィラデルフィア管、チャイコフスキーの４番／５番：　チャイコフスキーは如何に、と思い、試しに聴いてみたら、6番の「悲愴」のほか、この4番と5番。いいじゃないですか。4番のイントロで高々と響き渡るファンファーレが聴いているこちらの胸を熱くします。入手したのは、CBS ソニーから 1968 年に発売された国内プレスの LP ですが、なかなかの高音質。マーラーばっかり聴いていたこちとらの耳にも結構しっくりと来ますね。チャイコフスキーについて、その他の LP／CD のクレジットにある伝記や逸話を見るにつけ、19 世紀の音楽家はなんでみんなこんなに複雑かつセンチメンタルなんだろうと思います。現代人があまりに鈍感なのか、人間というものに対して認識が甘いのか、なんともはや。。。



ハイティンク＋コンセルトヘボウ、ドビュッシー作「交響詩：海」／「前奏曲：牧神の午後」／他　お茶の水で見つけたフィリップスの中古 LP（412-920-1）。帯の解説によればオランダ直輸入盤だそうですが、驚きの重低音。「海」は色々な映画音楽の BGM に使われているかもしれない。どこかで聴いたことがあるような気がする。底知れぬうねりと、果てしない水平線を連想させる導入部は、音楽と言うより絵画の趣きです。「牧神の午後」もまたしかりですが、目を瞑って聴いていると、風と緑と陽光の豊かな丘陵を 360 度見渡しているような錯覚に陥ります。これらの複雑な曲想をハイティンクは巧みに導きだしているのでしょう。生演奏に接してみたい、と思う曲のひとつです。



アドラー＋ウィーンフィル、マーラー3 番　上記のドビュッシーと一緒にお茶の水で買い求めました。ハルモニアムンディ盤 LP（HM-2.469）です。いかにも古そうなジャケットに惹かれて衝動買いしてしまったのですが、「当たり」でした。ノイズと帯域の様子から古い録音のようだな、と感じたのですが、奥行きやビビッドな立ち上がりなど、十分楽しめる音質です。何やらノスタルジックな雰囲気で不思議に思ったのですが、後日金田式アンプご同好の方にうかがったところ、オーケストラのスタジオ録音でも最古（1950 年代初頭）の部類に入る由。どうやらモノラル録音ではないかと思いますが、それでもスピーカーの前後に楽器類が奥行きをもって定位するので、コンサートホールの音響を疑似再生するのに十分なリアリティを示しています。3 番のできばえとしてもすばらしく、たっぷりと間合いをとったタクトで、６楽章のクライマックスまでじっくりと感動させてくれました。



スティーブ・ミラー・バンド、「Fly Like An Eagle」　キャピトルレコード。ごめんなさい。このジャンルに突如割り込んでびっくりされたと思いますが、実はコレ、とおるさんのオーディオのルーツ。前にも申し上げたかも知れませんが、1970 年代の FEN（極東米軍放送）は音楽の宝庫でした。ジャズ、ロック、ブルース、ブラックコンテンポラリーなど、時間に応じて集中的に流してくれる。合間合間の英語はほとんどリスニングできませんでしたが、今思えば英語力もさることながら、高周波1段（1石）＋クリスタルイヤフォンでは擦音／舌下音の聞き分けもうまく行かない。言い訳はどうでも良いですが、ともかくスティーブ・ミラーさんには痺れました。ブルースギターとしぶい節回し、小気味良いドラムスやベース、ちょっとウケを狙ってバンドが新しく導入したシンセサイザーなど、耳を楽しませてくれる要素はいっぱいありました。久々に取り出して聴いてみたのですが、新作のタマアンプとの相性も良いみたいです。

番外編：齊藤栄一氏指揮、「国立マーラー楽友協会」演奏「マーラー9番」　これはソフトではないのですが、去る5月28日、ご同好のお勧めでマーラー9番の生演奏に行ってまいりました。国立の一橋大学構内の兼松講堂で行われたものです。写真は兼松講堂全景、およびステージ内景。画面右側にすくっと立っているのは、ご同好先輩が持参の、われらが金田式DCマイクです。

演奏会前半は鈴置満里代さん出演のR・シュトラウス楽曲「4つの最後の歌」で、後半が「マーラー9番」のフル実演でありました。入場は全くの無料でしたが、あまり広範囲に案内を出していたわけではないようで、聴衆の数も大変少なかったです。しかし、ドーム型のステージ天井を擁する兼松講堂の音響効果は素晴らしく、また「マーラー9番」ばっかりを23年間も演奏し続けてきたという本楽友協会の実力も最高に発揮された模様。指揮の齊藤先生は偉大な故バーンスタイン氏を心から尊敬されているとのこと、熱のこもった指揮で、滅多に聴くことのできないすばらしい演奏となりました。やはりライブならではのハープの音色、ティンパニーの地鳴り、しなやかなバイオリンの響き、絶妙にからむコントラバスとチェロのハーモニーは何と圧倒的だったことか！いっしょに参加した娘ともども、しばし息を忘れて聞き入りました。ホルンほか管楽器の重厚さは、この講堂の構造も手伝っているのでしょうか、奥行きたっぷりです。シンバルの入り方も、熟練の一撃、と感じました。まさに齊藤先生とオケのみなさんの錬磨のたまものでしょう。バーンスタインやバルビローリの演奏するマーラーも大好きですが、みな過去の遠い記憶をレコードなどでたどるほかありません。今回の演奏はまさに自分がその場で体験できる貴重な楽音です。生きているって素晴らしい！大袈裟かもしれませんが、マーラー9番の主題そのものです。演奏が終わって出て来た国立の空は暮れかかって西の方は少し茜色に染まっていました。見事に消え入ったフィナーレのフレーズがまだ耳の奥で余韻となっていましたが、眼前の風景とぴったり重なりました。まさに、マーラーはこのシンフォニーのなかで現世に別れを告げたのだとあらためて思いを馳せた瞬間でした。

色々とソフトをさがすと、名演奏・好録音に行き当たることがあり、面白いですね。休日で時間が許すと、ずっとステレオの前に居座ってレコードを聴き続けてしまう。勤務日の夜は、遅く帰ってきてもアンプの電源を入れてしまう。ほとんど居眠りモードで聴いているんで、電気の無駄だというウワサもあります。趣味はほどほどに、ということなんでしょうが、とおるさんの場合は、コレが精神エネルギー源なので、しょーがない。（Part 5.6 の終わり：2006.06.04）

ビバ！クラシック：その2

マーラーの交響曲は、最新世代の指揮者たちによる録音が次々とCD化されており、演奏する側にとっても人気の高いジャンルなのだな、というのが良く分かります。とおるさんも、ぼちぼちと手に入れては楽しんでおりますが、店頭で新譜を買うと高いので、ついつい過去ものから選んでしまいます。というわけで、恐る恐る新しいジャンルに手を出し始めました。しかし、なかなかモーツアルトには走れない。唯一、フィリップスの2枚組、グルミオらによる弦楽・ピアノ・ホルン五重奏の作品集は気に入っています。様々な音色が楽しめ、オーディオの音源としては申し分ないのと、明るく弾みのあるフレーズには気分が晴れ晴れといたします。ビバ！クラシック：その2、として、最近そのほかにトライしたレコードをメモにしておきまする。

ブルックナー交響曲 8 番：　この作品、”重厚”そのもので、あまりに有名。なのですがとおるさんは長らく親しめなかった。どうやらアナログプレーヤと DAC を改善したおかげで、後になってその良さがひしひしと実感できたということでしょうか。しかも過去の巨匠の作品のすばらしいこと。今や伝説となった「クナ」の 8 番（Westminster: UCCW-1033/4）は、1963 年の録音なのに、弾けるティンパニー、唸るコントラバス、火のように咆哮するブラスとホルン、など。血沸き肉踊る、とはこのことかいな。ミュンヘンフィルと一体で奏でる主題は重々しいのですが、演奏のテイストは左様のありさま。ゆったり、たっぷり、というシーンもあり、楽しめます。全曲通して聴くと、ふう、と一息つきたくなります。一方、テンシュテットさんによる解釈（EMI: TOCE-13059）。ロンドンフィルは比較的冷静に反応している感じです。マーラー交響曲6番で見せた、崩壊すれすれの巨大な演奏ほどには思いつめていないように感じました。でも、アダージョの美しさは筆舌に尽くしがたし。お次は、朝比奈隆さんと都響の名演奏です。（Fontec: FOCD9124/5）屹立と指揮棒を振るその人が目に浮かぶような、きっちり・しっかりした流れで曲が進みます。聴く時は、こちらも背筋をピンと正して、しっかり前を見て、という心構えが要りますな。このほか、中古 LP で、ヴァント＋ケルン放送局管弦楽団の 8 番を偶然入手しましたが、一聴して、「！！！！！！！！」。LP いまだに恐るべし。

ブルックナー交響曲9番：　いわゆる「ブル 9」は、実はマーラーにハマる前、手当りしだいに買った LP やら CD やらでちょい聴きしてそのままになっていたのでした。マーラー9番とか、シューベルトの「未完成」の良さが分かるようになった後に、「ブル9」を再訪したところ、あらためてその曲想に触れることが出来ました。金管の長い長い吹奏で終わる独特な曲ですが、マーラー

の 9 番が黄昏れに染まる雲を想わせるのに対し、ブルックナーのこれは、身の終わらんとする夜明けに、その日初めの陽光が差し込み、微笑みつつ逝く、という暖かさを感じます。みなさん、9 番を書くころはお年で体力も気力も限界に来ていてるのに、思い入れを精一杯注ぎ込んでしまうのでしょうね。目頭が熱くなります。ここにかかげた3枚ですが、ジュリーニ＋ウィーンフィルの演奏(グラモフォン：UCCG-5096）は、「揺るぎない」という表現が当てはまるか。しかも、とても高音質です。ジュリーニの演奏は他にあまり持っていないのですが、同氏演奏のマーラー9 番を中古 LP（二百円也）で仕入れたところ、これも高音質かつ、ますます「揺るぎない」印象でした。 2 枚目は、私の好きなバーンスタインとウィーンフィルのコンビです。（グラモフォン：UCCG-70089）先のジュリーニとは、指揮者が違うだけで、録音時期も 2 年ほどしか離れていません。相変わらず、レニーは「音符を感性のままに解き放ってしまう」演奏スタイルです。間のおき方も、引っぱり方も、この人の手に掛かると自由自在。あらあら不思議。 3 枚目も、なぜか意識せずウィーンフィル。ただし、マエストロはシューリヒトです。1961 年の録音。CD に焼きなおすとき、それなりにお化粧したのかも知れませんが、マスターテープの力強い音質が彷彿と再現されているように思います。演奏そのものなのか、ホールの残響なのか、ともかく全てのフレーズが「深ぶかと」鳴り響きます。LP で聴いてみたいな、と思う1枚でした。（EMI: TOCE-14023）

大英帝国の作家たち：　ちょい聴き、から少し気に入ってしまったのが、ヴォーン・ウィリアムスとエドワード・エルガーの二人。音質より何より、メロディーが美しく、ほっとします。前者は「あげひばり」、後者は「弦楽セレナーデ」が、それぞれとおるさんのハートを刺激しました。趣味の問題でしょうけれども、モーツアルトが BGM 的につるつる滑ってゆくのに対し、この 2 曲はとおるさんの心のひだにしみ込んでくれるのです。（「あげひばり」DECCA: UCCD-7099、「弦楽セレナーデ」DECCA: UCCD-3903） ヴォーン・ウィリアムスについては、アンドレ・プレヴィン＋ロンドン交響楽団による 1970 年代のツィクルスが BMG から再版されていたのを買い込んでしまいました。雄大な感じのする交響曲1番（海の交響曲：コーラスつき）がユニークでした。（BVCC-38478／RCA 原盤 SX-2023））

チャイコフスキーとショスタコーヴィチ：　気のせいかも知れません。なぜかカラヤンの録音は高音が透き通り過ぎていて馴染めなかったのですが、チャイコフスキーの4・5・6番を収録したこの CD は、なかなかまとまっていて良いです。1960 年代後半の録音。（グラモフォン：474 284-2）金管をたっぷり聴きたかったら、チャイコフスキーに行こう。ところどころに、お得意のバレエ音楽の節回しが顔を覗かせます。 お次は、ショスタコーヴィチですが、最近我らが K 先生もお好みだとか。とおるさんは、作曲家の名前からどうにも「複雑」な曲想を連想してしまって、食わず嫌いでしたが、この「5 番」は良いかも。最終楽章の勇ましいティンパニー連打なんか、ちょっと持って行かれそうになりました。指揮はチェコ出身のカレル・アンチェル＋チェコフィルですが、マーラーやドボルザークの素晴らしい演奏で覚えておりました。「ショスタコ5番」も期待に違わず、きっちりと、しかも暖かい情緒にあふれています。

ハイドンは如何に：　没後 200 周年、とかで、レコード店の前面に出ていたのでつまみ食いしてしまいました。ひとつは、イタリア弦楽四重奏団による、四重奏曲集。（フィリップス：UCCP-7080）「ひばり」「セレナード」「五度」「皇帝」の4曲が入っています。ふと思ったのですが、「弦を鳴らすならフィリップス」ですねー。何だろう。しなやかさ、というか、腰、というか、奥行き、というのか。上品かつ重厚で、ううむヨーロッパじゃ、と感心してしまいます。 いまひとつは、デュプレ演奏のチェロ協奏曲1番および 2 番。1番は、お相手のバレンボイムがイギリス室内管弦楽団を指揮したもの、2 番はバルビローリ指揮・ロンドン饗の演奏です。

(EMI: TOCE-13019)チェロの協奏曲というと、これまで聴いたものはいずれも、しかつめらしいプロフィールのものが多かったのですが、ハイドンは明るく軽やかです。

いけメンジャズプレーヤー殿！：　すっかりクラシカルになってしまったとおるさんですが、原点はコンテンポラリーとロック、という生い立ちは以前紹介したとおり。今でも、ズシンとドシン系音源には、生き物としての魂が騒ぎます。まずは柔らかい方から。多分ジャンルはフュージョンということになるのでしょう。今のボブ・ジェームスにやらせると、ちょっと浮きそうな曲も、この年代の人が演奏すれば違和感ありませんなあ。ブライアン・シンプソンという人のアルバムで、「It's All Good」(VACJ-1007)。アチラのスムースジャズ部門で快調にヒットを飛ばした由。聴く当方もそれなりに年期が入ってしまって、他の方と一緒に外で聴く時はファッションも一緒に決めなきゃね。でも、とおるさん家のオーディオルームならお構い無し。エレキなベースも、ファンキーなキーボードも、矢でも鉄砲でも持ってこーい！　お次は、絵に書いたような「いけメン」トランペッター、クリス・ボッティ作の「イタリア」というアルバムです。CD 屋さんで誌聴し、気に入ったのでピックアップしました。ジャケットの表写真は、人に見せるのはちょっと恥ずかしい。ホントは我が輩の趣味では無いのだが、中身の音楽はオーライです。肝腎のトランペットの響きはなかなか素晴らしい。しっかし、この男、マスク甘過ぎるぞ。　一方、Franck Avitabile さん率いるピアノトリオ作品「Paris Sketches」。これも、タッチアンドゴー、で買ってしまったやつ。試聴コーナーのヘッドホンは必要以上にバスブーストしてあるらしく、とおるさん家に持って帰ってきて聴くとなんか印象が違う。けれども、この CD にはたっぷり低音が入っています。気持ちイー、ってやつですな。音楽にもそこそこ叙情性があって、こいつはなかなか良いぞよ。　トリは、いけメン、ならぬ、おじメン集団：マンハッタン・ジャズ・クインテットによる、ベテラン味こってりの近作、「V.S.O.P.」。名前そのまんまのノリノリアルバムです。やっぱり、スタンダードナンバーは聴いてて安心するよなあ。「Autumn Leaves」「My Funny Valentine」の冒頭局に続き、「Time After Time」なんてシンディ・ローパーの懐かしチューンが入っていたりします。ドラムスのスティーブ・ガッドは相変わらず元気。とおるさんも、スティーリー・ダンのころからのファンだぜよ。これからもがんばってくださいね～♪

最近のとおるさんの休日は、まず朝早くからリスニングで幕開け。回路のチューニングが必要な時は前の日からの徹夜になることも。クラシックにも、ジャズにも、コンテンポラリーにも、まだまだ知らない名曲や名アルバムがあるはずなので、もう少し漁ってみることにしましょう。(Part 5.7 の終わり：2009.05.06)

アーカイブの終わり　(20161029)